［特集Ⅱ］

第１コース

外国の学校について知ろう
学校を手がかりとした国際理解
── 言葉を学ぶということ ──

中　田　有　紀*・安　達　仁　美**・大　谷　　尚***

１．テーマと学習活動の概要
２．活動の概要
３．レポートとその評価
　３－１．レポート課題のテーマ
　３－２．生徒のレポートに関する評価
４．まとめ

１．テーマと学習活動の概要

外国の学校や子どもたちの教育についての理解を深める手がかりとして、本コースでは、海外の子どもたちが、どのように言葉を学び、生活しているのかについて、生徒に考える機会を提供すること、言葉の多様性とその重要性について理解してもらうことを目的とした。

本コースでは、インドネシアのイスラーム学習活動とネパールの識字教育活動について、コース担当の授業者が、授業を行った。生徒自らが考え、自らインドネシア、ネパールへの興味を持ってもらうことを目標に授業を組み立て、三種類の活動を行った。

はじめに、生徒をインドネシア班とネパール班に分け、各班でインターネットや授業者が準備した事典等の文献資料を用いて、それぞれの国の文化、宗教、社会に関する情報を収集させた。その後、調べたことついて班ごとに発表させた。次に、中田がインドネシアについて、安達がネパールについての講義を行った。その際、ビデオ、写真等の映像資料を用いた。最後に、生徒たちがインドネシア人留学生とネパールの識字教育活動の現場を視察したボランティア活動家にインタビューを行った。

３日間のうち、２日目は台風のため、授業は午後からの開始となったが、参加した生徒14名のうち12名は、３日間の授業にすべて参加し、またレポート課題には、11名からの提出があった。レポートを提出した11名には、２日目、３日目に参加できなかった２名も含まれており、生徒の興味関心

* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程後期課程
** 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程前期課程
*** 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

を引く授業の取り組みができたと考えられる。

以下では、各活動の詳細について、また、レポート課題への生徒の取り組みについてまとめ、本コースの成果と課題点を考察する。

2．活動の概要

≪一日目≫

月　日	時　間	活　動　内　容
8月8日(金)	10:30～11:00	A．オリエンテーション ・挨拶、スタッフ自己紹介 ・3日間の授業の目的、授業内容の説明 ・参加者自己紹介
	11:00～12:00	B．アイスブレーキング ・シークレットフレンズ ・こんな人いませんかゲーム ・シールDEグループ分けゲーム
	12:00～13:00	昼　食
	13:00～14:30	C．インドネシアとネパールについて知ろう（調べ学習）
	14:30～14:45	休　憩
	14:45～16:45	D．発表準備
	16:00	解　散

A．オリエンテーション

本コースに参加した生徒は、14名（女子11名、男子3名）であった。オリエンテーションでは、スタッフの自己紹介の後、3日間の授業目的と内容を説明した。その後、参加者それぞれが、名前、ニックネーム、高校名、参加動機、将来の夢について自己紹介をした。　本コースでは、3日間にわたって合計14名の高校生とさまざまな活動を行った。

B．アイスブレーキング

参加者同士が打ち解け、コミュニケーションが取りやすい環境を作るため、3種類のアイスブレーキングを行なった。

①「シークレットフレンズ」

シークレットフレンズは、3日間を通して行なったアクティビティである。まず、一人ひとりがクジを引く。クジには参加者の名前が一人書いてあり、その人物が自分のシークレットフレンドとなる。シークレットフレンドには、3日間を通して気づかれないように「良い事」をしなければならないというルールである。初対面の人との積極的なコミュニケーションをうながす目的で行われた。

②「こんな人いませんかゲーム」

「(　)さんは、(　)へ海外旅行したことがあります。」などの空欄を設けた項目を数種類用意し、周りの参加者にインタビューをしながら、空欄を埋めていくゲームである。積極的なコミュニケーションと相互理解をうながす目的で行われた。

③「シールＤＥグループ分けゲーム」

言葉を使わず、額に貼られたシールの色ごとにグループを形成し、その早さを競うゲームである。これは、単なるアイスブレーキングだけではなく、言葉を使わずジェスチャーだけでコミュニケーションをとる難しさと可能性を知ることによって、言葉の持つ役割に気づかせることを目的として行われたもので、このコースの導入の一部として機能させることをねらいとした。

Ｃ．インドネシアとネパールに関する調べ学習

コンピュータ室へ移動し、インターネットでの検索を行い、インドネシア、ネパールの情報収集を行わせた。２人～３人で一組になり、文化、民族、祝祭日等の情報収集を行った。授業者は、予め検索方法や情報収集に役立つサイトを生徒に伝え、それをもとに、各国の概要の理解に役立つ情報を収集した。

外国の情報を検索する場合、カタカナで検索キーワードを入力するより、英語で入力する方が、より多様な情報が入手できる。しかし、時間が限られていたこともあり、英語入力ではなく、カタカナでの検索の仕方を生徒に伝えた。

Ｄ．発表準備

各自調べたことをまとめ、発表の準備をする際、授業者は、実物投影機、模造紙、スケッチブック、サインペン等を準備し、生徒は、それぞれ発表しやすい方法を選択し、発表に用いる資料づくりに取り組んだ。ネパール班は、インターネットで収集し、印刷した資料を整理し、実物投影機を用いて発表の準備をする生徒が多かった。他方、インドネシア班では、模造紙やスケッチブックに地図や情報をサインペンで書き出して、準備する生徒が多かった。

≪二日目≫

月　日	時　間	活　動　内　容
8月9日(土)	10:30～13:00	台風のため参加者自宅待機
	14:00～14:30	Ｅ．インドネシアのムスリム言語教育について知ろう Ｅ－１．インドネシア隊の発表＆質疑応答
	14:30～14:45	休　憩
	14:45～15:45	Ｅ－２．インドネシアに関する講義（中田）
	16:00	解　散

二日目は、台風のため、予定が大幅に変更せざるを得なかったが、正午過ぎには10名程度の生徒が集まった。生徒同士がすでに携帯電話の連絡先を教えあい、親しくなっていたため、授業開始時刻が遅れたにも関わらず、事前に連絡を取り合っていたことで、本コースの大部分の生徒が参加した。

授業は、14名中、13名参加を確認したところで、14時より開始することとなった。

Ｅ－１．インドネシア班の発表＆質疑応答

前日に収集した情報をもとに、インドネシア班の発表を行った。

生徒たちが発表した内容は、インドネシアの地理、言語、民族、祝祭日、教育制度についてであった。２人一組になって情報収集と発表を行った生徒たちもいれば、ひとりで作業し、発表に取り組んだ者もおり、様々であった。一つの国の中で異なる言語（地方語）が存在することや民族の違いに強い興味を抱き、授業者が準備した事典を一日借りて、興味ある部分を読んできた、意欲的な生徒もいた。

Ｅ－２．インドネシアに関する講義（中田）

講義では、インドネシアの子どもたちが、学校でインドネシア語を学ぶとともに、地域社会のモスクでアラビア語を学び、クルアーンの朗誦について学んでいることについて、理解してもらうことを目的とした。

まず、講義に入る前に、生徒たちに、インドネシア語とアラビア語が全く異なるということを体験させるため、「食事をしようゲーム」を行なった。このゲームでは、14人を４班に分け、インドネシア語のメニューとアラビア語のメニューの２種類を配り、バランスよく５品を注文することを想定し、選ばせた。メニューは、インドネシア語とアラビア語で同じ内容のものであり、最後に日本語のメニューを配り、全く異なる言葉を学ぶインドネシアの子どもたちの状況を少しでもイメージできるように試みた。

インドネシアの子どもの大半は、学校や家庭でインドネシア語や地方語を使用する。これらの言語に加え、人口の約90％を占めるムスリムの子どもたちは、アラビア語を学ぶ。アラビア語は、イスラームの教義に関する理解に欠かせないものであることを強調した。

配布資料に示した学校教育制度図をもとに、インドネシアの教育制度を説明し、学校では、国語、算数、理科、社会等の一般科目と共に宗教科目も学ばれていること、他方、学校教育の外でも、人口の90％を占めるムスリムの子どもたちが参加している教育活動があることを説明した。ムスリムの子ども達が参加するアラビア語とクルアーンの学習を行うイスラーム学習活動がどのように行われるのかについて、写真やビデオ等の映像資料を提供した。さらに、イスラーム寄宿塾での生活を紹介した映像資料の一部を見せ、アラビア語やイスラームの教義について学びつつ、一般科目の勉学にも励み、実社会が抱える問題や自らの進学についても考えるインドネシアの女子高生を紹介した。

アラビア語が大事にされているのは、ムスリムとしての生き方と深く関係すること、実生活に必要なインドネシア語の学習に加え、宗教上大切にされている言葉の学習が存在することを伝える講義とした。

≪三日目≫

月　日	時　間	活　動　内　容
8月10日（日）	10:30～12:20	F．ネパールの非識字者教育とユネスコの活動について知ろう F－1．ネパール隊の発表＆質疑応答 F－2．ネパールに関する講義（安達）
	12:20～13:30	昼　食
	13:30～14:10	G．インタビューを通してネパールを知ろう
	14:10～15:00	H．インタビューを通してインドネシアを知ろう
	15:00～15:15	休　憩
	15:15～16:00	I．セミナーのまとめ ・アンケートの実施 ・修了証授与 ・記念撮影
	16:00	解　散

F－1．ネパール隊の発表＆質疑応答

一日目の調べ学習において、収集した情報をもとに発表を行った。発表準備の段階から、発表内容によって、2人一組のグループに分かれていた。

生徒たちは、ネパールの地理、言語、紙幣、衣食住の文化や宗教、教育について発表した。実物を見せたり、ネパール語を紹介する場面で見ている側に繰り返しを呼びかけるなど、見る側を飽きさせない工夫がされた。また、発表には、実物投影機やスケッチブック、模造紙を効果的に用いた。教育に関しては、教育制度だけでなく、識字率や就学率が低い問題など、ネパールが抱えている社会問題についても触れられた。

F－2．ネパールに関する講義（安達）

ユネスコの「世界寺子屋運動」の取り組みを中心に、2002年3月に実施された「ユネスコユース世界寺子屋運動スタディツアーINネパール」の参加者である筆者（安達）と西脇小百合（滋賀医科大学4年生）の2人が講義した。講義では、識字プロジェクト実施地であるルンビニの寺子屋（識字教室）と村の様子を中心に説明し、非識字状態の危険性と識字の重要性を知ることから、文字が人間の生活に重要な役割を果たしていることを意識化させることを目的とした。

はじめに、参加者を3つのグループに分けて、非識字体験ゲームを行なった。このゲームは、非識字状態で起こりうる事故を体験するゲームである。まず、2つのボトルを用意し、野菜ジュースと青汁をそれぞれに入れ、野菜ジュースが入ったボトルには、ネパール語で「薬」、青汁が入っているボトルには、ネパール語で「農業」と書いた紙を貼っておく。参加者は病気であるという設定で、2つのボトルの中から「薬」と書かれていると思う方のボトルを選択し、実際に飲んで確認する。間違えて「農業」を選んでしまった場合、苦い青汁を飲まなければならない。文字が読めないと、農薬と薬を間違えて飲んでしまうことがあるという事故を、疑似体験するのである。

非識字状態を体験した後は、グループ内で、非識字状態で起こりうる障害についてディスカッションをした。その後、ユネスコの活動や世界中の非識字者数について講義し、非識字者が苦悩の後、識字教室に通い生活が改善するまでを描いた、「ミナの笑顔」という15分のアニメを上映した。そ

の後、ユネスコユーススタディツアーでの体験を、写真や映像を通して講義した。安達は主に、寺子屋（識字教室）での学習の様子を映像と写真を通して講義し、西脇は村の様子について講義した。

G．インタビューを通してネパールを知ろう

さらに、ネパールへの理解を深める機会を提供するためと、午前中に行った講義に対する質問を行うために、安達と西脇にインタビューを行なった。午前中に行った講義の中でも、スタディツアーの内容が印象的だったのか、インタビュー項目も、ネパールの様子や、スタディツアーやユネスコへの参加方法に関する内容が目立った。

H．インタビューを通してインドネシアを知ろう

インドネシアへの理解を深める機会を提供することを目的として、名古屋大学国際開発研究科のインドネシア人留学生にインタビューを行った。インドネシア班だけでなく、ネパール班の生徒たちも積極的に質問を行った。インドネシア語の通訳は中田が行った。内容は、主に、クルアーン学習やイスラームについてであった。

I．セミナーのまとめ

本コースでは、生徒にとってあまり身近に感じられない国についての文化、社会、教育について学ぶ機会を提供した。生徒たちは、関連する情報を自ら収集し、それを伝え合い、さらに知識を深めるため、講義の聴講と共に、インタビューを試みた。３日間を通して、本コースの学習は、能動的に知識を獲得し、それを伝え合い、さらに考えを深める作業であった。

台風の影響があり、二日目、三日目の予定に多少の変更が生じたが、生徒の出席率は非常に高く、また意欲的な参加が見られた。一日目の最初の活動として設定したアイスブレーキングの効果が予想以上にあり、参加した生徒同士が連絡先の交換を積極的に行っていたことは、台風の影響があった二日目、開始時刻が遅れたにも関わらず、14人中13人が参加するという、高い出席率に反映されたといえよう。

３．レポートとその評価

３－１．レポート課題のテーマ

第１コースでは、３日間のセミナーを通して、以下の２つの課題を出した。

【課題①】

中学生にインドネシアとネパールについて紹介することになりました。あなたは何について話をしますか？そのためにどのような準備をしますか？インドネシアの場合、ネパールの場合について、それぞれ述べて下さい。(400字以上)

【課題②】

人が生きていくことと「言葉」の関係について、あなたが思うことを述べて下さい。

3－2．生徒のレポートに関する評価

【課題①】

レポートの内容に、ほぼ共通してみられたのは、中学生に紹介したい内容に、3日間で行った活動内容が反映されているという点である。調べ学習の結果や、インドネシア班、ネパール班の発表内容、また、講義内容など、生徒自身が受けた講義を、紹介したい内容として取り上げている生徒が目立った。

しかし、講義の内容のみを取り上げた生徒だけではなく、調べ学習で得た知識と講義で聞いた内容を総合し、紹介したい内容として取り上げている生徒もいた。インドネシアの講義ではマジョリティであるムスリムの子どもの教育に焦点をあてて講義を行ったが、ある生徒は、調べ学習において言語と民族の多様性に興味を抱き、他の宗教を信仰するマイノリティの人々に対しても関心をもっていた。レポートでは、中学生に紹介したい内容として、「実際少数派ですが、他の宗教を信仰している人もいることや、礼拝についてふれて終わりたい」と記述していた。

また、準備に関しても、同様に3日間の講義内容が反映されていた。インドネシアとネパールに関する講義では、映像資料や写真資料、体験的に知るゲームなど五感を刺激する工夫がなされたが、このような工夫が印象的だったのか、「イメージを膨らませるため、写真（あれば）や絵を私なら準備して使います。」、「僕が実際中学生に紹介する立場にたったら、必ず画像等を用います。…実際にみるものがある発表と、ただ聞くだけの発表では印象がぜんぜん違うからです。」、「口で話をするだけでは中学生は退屈になってしまうし、話す方としてもおもしろくない。」などの、紹介方法に関する記述も目立った。また、ある生徒は、ネパールに関して、初めは自分も周りの人間もあまり知らなかったことを取り上げ、「中学生が僕達同様、ネパールについてほとんど知らないとみなして紹介することにします。」とのべ、紹介する相手が何も知識がないということを想定して、わかりやすい紹介方法を考えていた。

本コースでは、生徒たちが講義を聴くだけでなく、インドネシア、ネパールのように「身近ではない国」の教育、文化などについて調べたことにより、具体的にインドネシア、ネパールをイメージできたようである。

【課題②】

この課題に対し、生徒たちは、言葉の大切さ、重要さについて述べており、主に、「言葉は生きるためには必要不可欠なもの」ということを再認識した生徒が多かった。

ネパールの非識字者についての講義で学んだことに触れ、生きていく上では、「衣・食・住」は大切であるが、言葉も大切であるとか、「言葉がなかったら…生きてゆけない」という意見もあった。こうした意見があったことからは、言葉が存在する中に生きながら、その言葉を用いてコミュニケーションを取ることが困難な非識字者の状況を、コミュニケーションの手段として言葉が存在しない状況に、置き換えてしまっていることがわかる。

これは、ネパールの非識字者のビデオ（『ミナの笑顔』）の主人公ミナが、読み書き能力を持たないために、日常生活に支障が出るという点が、ストーリーの中で強調されていたことが影響していると考えられる。そのため、ミナのように自ら理解し、コミュニケーションの手段として用いる言

葉が「ない」状況が印象に残ったのだろう。

また、他の生徒は、異なる国や文化で生きている人々を理解すること、コミュニケーションを取る上で、言葉を理解することが重要であり、言葉は「人と人をつなぐ橋のようなもの」、または「自分の可能性を広げることだと思った」と述べる生徒がいた。

こうした回答からは、言葉を学習することの大切さについては考えていると言えるが、言葉の多様性、それを認識することの重要性を感じ取るまでには至っていないことがうかがえる。

授業者は、言葉とは、単一の目的のために存在するものではないことや、言葉の多様性についても考える機会を提供することを目的に、授業設計を試みた。そのため、日常生活に必要な読み書きの能力の乏しいネパールの子どもたちが通う識字学校の様子と、インドネシアのムスリムの子供たちが宗教上クルアーンを読むために必要とされるアラビア語学習の様子について紹介した。

本コースで取り上げた両国の教育状況は、高校生にとっては、なじみの薄いものであった。それにもかかわらず、三日間の授業を通じて、生徒たちは、海外の国、地域における言葉や宗教の大切さを認識したことは、レポート課題①の回答からも伺える。しかし、生徒たちは、概して言葉の多様性よりも、言葉が大切であるかについて、さらに、言葉を学び、日常生活で支障のない自らの立場のありがたさ、その大切さを認識するに留まった。

こうした生徒のレポートに対し、授業者は、生徒たちが、さらに言葉を学ぶということについて、考えを深めることを願い、コメントを付け、レポートを生徒に返した。

たとえば、「人と言葉は切り離せない、…パートナーである」と述べた生徒に対し、中田は、「言葉って一種類ではないですね。国や地域によって使われ方も違うし、解釈の仕方も一様ではないことも多いです。異なる文化圏で暮らす人々と助け合う場合、相手の慣れ親しんだ言葉を理解していると、より相手が安らぐ励ましができたり、また自分のこともより伝えることができるかもしれませんね」とコメントした。また、「言葉は生きていく上でかかせないもの。言葉を全世界共通にすれば良い」という指摘に対し、安達は、「全世界が共通語を持つことで生まれてくる利点は色々と考えられますが、欠点もあるように思います。言葉には、文化が含まれていると思います。…言葉からその国の文化を知ることもできると思うのです。言葉の壁は、文化を生み出しているようにも思います」とコメントした。また中田は、「異なる文化、考え方、言葉から、私達は学ぶことが大いにあると思う。おたがいに異なるものを持っているからこそ、相手の良さを深く知ることにもつながるし、こちらをより深く知ってもらうこともできる…と思うのですが、いかがでしょうか」とコメントを付した。

4．まとめ

本コースでは、外国の学校や子どもたちの教育についての理解を深める手がかりとして、生徒に「ことばを学ぶ」ということの多様性について考える機会を提供することを目的とした。

三日間の活動から、本コースの成果として挙げられるのは、次の二点である。まず一点目は、生徒たちの主体的な授業への取り組みがみられた点である。調べ学習や発表を通して、インドネシアやネパールのような「身近ではない国」が具体的にイメージできるようになったことに加え、レポート課題に取り組むことで、自ら情報収集し、考え、それをいかに伝えるかということを生徒たちは

学習したことが観察された。

もう一点の成果には、参加した生徒の高い仲間意識が挙げられよう。初日に行ったアイスブレーキングや調べ学習、二日目、三日目に収集した情報を伝え合う発表は、生徒たちが、協力して取り組むことが求められたため、活動を共にする仲間への関心も高まり、仲間意識が高まったと考えられる。レポート課題の提出の際に、授業者にお礼の手紙を付した生徒が3人いた。中には「同窓会をやりたい」との声もあった。こうした仲間意識は、3日間の生徒の出席率の高さ、レポート提出率の高さにも反映された。

他方、課題として残ったのは、ことばを学ぶことの多様性を十分に伝達し切れなかった点である。レポート課題②の設問の設定にも、生徒の意見を引き出すような工夫が必要であった。さらに、講義の方法や展開の工夫も考慮すべきだったと考える。

授業では、ネパールとインドネシアのことばの学習について、担当者が別々に講義を行なったが、その後、それぞれの国の違い、共通点や多様性について話し合う時間を設けることができなかった点が残念であった。そのような時間を設け、二つの国の違い、それぞれの国が抱える問題点、さらに我々が学ぶべき点等についての意見交換ができれば、ことばを学ぶことの多様性と複雑さ、異文化理解の難しさと面白さを、より丁寧に伝えることができたのではないかと考える。